

# 雨引の里と彫刻 2011

～冬のさなかに～

— 展示中の全 42 作品を紹介 —

開催期間：1月15日(土)～3月21日(月) 9:00～17:00

「雨引の里と彫刻」は、雨引の里と彫刻実行委員会（菅原二郎委員長）が主催となり、開催地元の協力を得ながら運営する彫刻展です。

今回で8回目の開催となり、桜川市（旧大和村地区）高久地域の里山や集落などに、参加作家42人の彫刻作品が約3か月間設置されています。

平成8年に7人の作家の参加でスタートした第1回作品展から、回を重ねるごとに作家の人数も増え、ここ数年は40人を超える作家が参加する桜川市を代表するイベントに発展しました。

今までは、春、秋の開催が中心でしたが、今回は「冬のさなかに」と題し、あえて寒さの厳しい冬の季節を選んだのは、作家たちの新たな事への挑戦の現れです。

点在する作品群をオリエンテーリングのように巡り、彫刻と設置される場との関わりを通して日本の里山の美しさなども楽しむことができます。

冷たく凛とした空気の中に、42の彫刻がどのような身の置き場をつくりあげているのかお楽しみください。

作品名	作家名 (敬称略)
作品	作家のコメント

■問合せ「雨引の里と彫刻2011」インフォメーションセンター 大和ふれあいセンター「シトラ」内 ☎080-6545-6507（会期中のみ）



**1 集積（木の花）**  
**2 村上 春久**  
今回使った木は訳あって伐採された我家の桜です。長い間私達の営みと木との調和が無理なく過されてこられたのに、もうその美しき花をみる事はできない。無情の利那を感じつつ幹から枝までを集めて内なるもの外なるものをみせながら、でき上がった木の花です。



**1 雨引く里の田守る 雷神**  
**2 國安 孝昌**  
北関東の冬の夕暮れは早い。幾日、ひとりで低く赤い太陽を眺めたことだろう。零下30度に育った私には雨引の冬は優しく穏やかで親しげだ。私は、透明な空気のなか田畑を守る雷神をここに立てたいと思った。



**1 アメ・ツチ（庭の様子）**  
**2 齋藤 徹**  
通り過ぎてしまえば、そう道端に、ぼつかりと空いた寒林。誰か愛でるのか？ 野の庭。野ノを配してどう変わる？ 野の庭。



**1 深い水**  
**2 高梨 裕理**  
このあたりには、石が積まれている所が多い。その風景は大切だと思つた。その横に作品をおいてみる。



**1 内側のかたち 10LS-CARPA**  
**2 菅原 一郎**  
私の作品は四角い石の外側を極力残し、内側を自由な形で空間・量を作ろうとした。その意図は外側の幾何形態と表面及び内側の有機形態のバランスを求めた。手を加えてない部分に着色、彫つた部分は素材の色で残し、そのバランスを強調しようとした。



**1 Vortex Form 2011**  
**2 菅原 隆彦**  
今回の作品は長さ5.5mの角鋼を数本使い巻いて創りました。繰り返して巻く事により創られる絶妙な鉄の表情が気に入っています。1つの作品を創るのに時間がかかりますが、そうした過程の中で鉄の表情を感じたりと、今までとは違った発見がありました。



**1 石の軀V-塊物**  
**2 山添 潤**  
石を彫る その瞬間から石の存在は曖昧になってゆく。石は僕らの力を呑み込みながらその質量を徐々に減らす。力と時間が重なり合い纏わりつく痕跡やがてその集積が溢れ出し塊化してゆく。軀をもちはじめた石の確かな存在を感じたい。



**1 追っブリニウス・逃げるブリニウス**  
**2 島田 忠幸**  
闘争本能は、オスの旗印みたいなものだと思う。時代の価値観が入れ替わるたびに、先頭はめまぐるしく入れ替わる。敵を追っていたはずの自分が、その敵とされているのだ。グルグルと追い駆けつこうが終わらない。



**1 Tornado**  
**2 中村 ミナト**  
渦巻を見ていると、引き込まれそうな恐怖を感じます。たとえば渦潮や、童巻や、人の渦、それらの大きなエネルギーを形にしました。



**1 crossroad**  
**2 廣瀬 光**  
石を分割する鉄の板はそのまま作品が置かれた空間をも分割すること。今まで見えていた風景にほんの少し緊張感が生まれる、存在する位置や時間によってイメージはさらに変化し、記憶の中の風景がまた交差する。



**1 オニムシの囃**  
**2 金沢 健一**  
この場所を見つけた時に、1人の女性が土を掘り返し、作業をしていた。何をしていたのか尋ねると「オニムシ（オニムシ？）」傍らに置いてあったバケツの中にはカブトムシの幼虫がてんこ盛りになっていました。この出来事が作品のモチーフとなった。



**1 A-111**  
**2 井上 雅之**  
風景を見ていると、何かもともとそこにあったと感じることがあります。それが自然のものか、人が作ったものであったのかを確かかに言いつては残された手がかりを頼りにしてかつての姿を探ってみました。少しばかり樹木の様でもありますが。



**1 Venus**  
**2 渡辺 治美**  
子供の頃から夜空を見るのが好きだった私。時空を超えて無限に広がる空間に旅したくなる。生命体としての自分の存在を知ることができるよう気がして。私と宙との距離を縮める乗り物であるロケットを形造る事によって、宇宙の旅人気分を夢を馳せる。



**1 光のあるところへ**  
**2 横山 飛鳥**  
冬から春へと向かういま、光は日に日にその強さを増し新しい季節の訪れを予感させる。早春の光を全身に感じながら、その先にある希望へとまっすぐ歩を進めてゆく。この林に光が差し込むとき、その一瞬の光により作品は完成する。



**1 天空へ**  
**2 大栗 克博**  
空の四方を限なく見渡せる環境に仕事場を移したからか、また年齢からくるものなのか、空を見ている時間が長くなった。視線を上げ、雲の流れや赤く染まる夕焼、飛び交う鳥達の石も少しだけ天空へ押し上げ、パッと解き放してみたくなくなった。



**1 剪定季**  
**2 山本 憲一**  
石の塊を「剪定」するをテーマに近年制作して来り。年輪定にはある意味合理的で理不尽な人間の知恵でもあり樹木や果樹の成長ならいなさる。今回の作品では石の割れ肌や表面の側からたどり着く温度を感じて頂ければと考えます。



**1 しゃがんで待つ**  
**2 中井川 由季**  
畑が連なる小高い場所に小さなビニールハウスを見つけた。それは以前、作物を売らせるために作られたが、今は使われていない。骨組みだけが残るハウスの中に、何かの訪れをじっと待っている形を置こうと決めた。冬の仕事は力を蓄えて待つことだ。



**1 六方向の壁**  
**2 松田 文平**  
地平を這う冬の太陽を、額で受け止めるがごとく。